

酒造三題 史料A 酒造株

A1 酒造株の実態調査

乍恐以書付奉申上候

松平甲斐守殿領分

葛下郡南今市村

甚兵衛

御用の儀に付、被召出奉畏罷出候処、私

酒造株所持仕候右高何程、并正徳年中より

当時へ造り高御尋被遊候に付、左に奉言上候

私儀、百姓渡世の者に御座候所、早損不作に

出合、百姓一件にては難取続候に付、酒造

稼増仕度段、去る子年より地頭表へ

相願候所、御聞届、年分に式拾石の株

被差免、酒造商売、百姓相兼渡世

仕罷在候、尤其節より三五年程は右作り

高の通相漬候得共、捌方宜鋪御座候故

其後年々相増、当時百七拾石程は酒造

其時々地頭表へ相届

仕、尤今以右式拾石の株にて、右の通相漬し

罷在候に付、乍恐右の段、御尋に付、書付を以

奉申上候、御聞届被成下候は、難有奉存候、以上

南今市村

天明五巳年十二月

付添人

弥右衛門

御番所様

②

A2 酒造株の貸借

酒造借用証文の事

一 此度、貴殿御所持の酒造諸道具、

并住宅共、当辰より丑年迄、拾ヶ年限

借用申候、引払義は丑年八月中に

相渡可申候。御対談にて借請候処、真正に

御座候。右に付、規定左の通

一 酒造蔵 壹ヶ所 五間に拾式間也

〇石

右 数高六百石迄造込、出来候様諸道具

一式取揃御渡可被下候

一 金式百両也

右は為敷金差入置申候。年季中

無利息、年限御引渡の節、無相違

御返済可被下候

一 家賃、酒株諸道具料義、来る巳

極月百両、午七月百両 両度に金

式百料宛、丑七月迄年々急度差上

可申候。但辰年の義は多分造込

出来不申に付、六百石式百両の割合を以

差上可申候

一 酒造蔵、竈屋、水車、都て家根替の

義は御修復可被下候

一 酒造蔵、物干場、水車の御地面御上

納、諸役儀共御勤可被下候

③

一 水車上納米 八斗

右は年々私方より貴殿へ無相違御渡可申候

一 別紙帳面の通、諸道具等御引渡の

砌、不足品等有之候はゞ、敷金にて御引取可被下候

一 年季中、万一水火天災、非常の

義有之候節は、貸主は貸渡し置候

諸品損、借主は仕入いたし置候物品
損失に相成可申候

右の通箇条相定、借用致候上は

諸道具、水車に至迄、年季中私方にて
精々手入可致候。御村方御役儀等

貴殿御勤可被下候、万一年季中御約定
違乱仕候はゞ、請人罷出、貴殿へ少も

御迷惑相掛申間敷候、為後日請印
致し證文差出置候処、仍如件

諏訪郡岡谷村

請人

慶応四戊辰年十月 武居大次郎 印

同

林善右衛門 印

本人

林源次郎 印

伊奈郡横川村

市野瀬金之助 殿

⑦史料C 減石の触

C1 関八州、米不作に付酒造米減石の御触

諸国酒造の儀、去る未年、関東筋武州・

上州川々出水、海岸附村々、潮風等にて

田畑損毛多、御府内并関内在々米価

格外引上げ候儀に付、追て御沙汰有之候

迄、関八州酒造半高相減、半高酒造可

致旨、同年十二月中被仰出、其余国々の

儀は翌申年、上方、東海道筋川々度々

の出水、田畑水腐致し候場所も不少

米価引上げ候間、諸国共関八州同様

酒造半高相減半高造、同年九月中

被仰出、夫々御触御座候儀にて、当時右御

触面の通、半高造の割合を以、米買入

追々造込時節に差向候処、去々酉、去戊

両年は作柄相應の趣に候得共、米価引

下げ不申、当節御府内米直段百俵七

拾両余、大坂表同五拾両余位の儀に

有之、当今御時勢品々被仰出候儀も

御座候に付ては、非常糧米は勿論、諸

家囲米等可相嗜折柄に付、諸国酒造

半高造には候得共、猶又減石可被仰出（候）哉、

尤当亥年の儀、未諸国作割も治定の

儀相分兼候間、諸国一般御触出の儀は

先づ見合、関八州の儀は御府内近の
国々、前書買入米等も可有之義にて、此

⑧

上米価高直相成候ては小前末々迄難儀および、自然人氣にも拘り可申候間、関八州酒造の儀は、鑑札高の三分二相減、三分一酒造可致旨被仰出、取締方其外の義は是迄の通可心得旨御触御座候方と奉存候、依之此御触案取調奉伺候、以上

亥八月

竹内下野守

川勝丹波守

立田 録助

池野勇一郎

黒坂丹助

覚

関八州酒造減石の儀、御勘定奉行相伺候別紙触案の通可相達哉の事

大目付へ
御目付へ

関八州酒造の儀、追て及沙汰候迄、銘々鑑札高の内、半高相減、半高酒造可致旨、去る未年十二月中相触置候処当今非常糧米手当も可有之義にて此上米価高直相成候ては、下々難儀可及間、追て及沙汰候迄、関八州酒蔵人共、銘々鑑札高の内、三分二相減、三分一

⑨

酒造可致候、尤隠造、過造等無之様、取締方の儀は弥嚴重改方可申付候間、若隠造、過造等致においては、其者は勿論、其所の役人迄吟味の上、急度可申付条、心得違無之様可致候

右の通、関八州、御料・私領・寺社領にも不洩様早々可触知者也

八月

右の通可被相触候

右書付周防守渡之

八月廿四日

右三通扣、御側衆へも一通遣之

書付渡方

一 三奉行へ一通

奥書

右の通可被相触候

一 御三家御城附一通

同

右の通相触候間可存其趣候

一 一橋殿
寿千代 家老衆へ一通

同

右の通相触候間、可被得其意候

一 京都大坂其外へ次飛脚を以遣之